

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 1 日現在

機関番号：82621

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21720064

研究課題名（和文）二十世紀イタリア芸術における前衛と古典回帰とモダニズムに関する研究

研究課題名（英文）Research on Twentieth Century Italian Art: Avant-garde, *Ritorno al classico* and Modernism研究代表者 阿部 真弓 独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館・企画課・研究員
(Abe, Mayumi)

研究者番号：60537330

研究成果の概要（和文）：

本研究は、20 世紀前半のイタリア美術の絵画作品とそれをめぐる著述における、前衛と古典回帰とモダニズムをめぐる諸問題を再検証することを目的としている。前衛絵画の時代を経験した欧州の画家たちは、1910 年代半ばから「古典回帰」時代を迎える。本研究は、この時代の絵画作品を研究対象として、作品調査および画家たち自身による著述の精読を通して、図像、様式、技法について、個別の作品における古典古代、過去の美術、神話的主題の記憶に焦点をあてて分析するとともに、前衛と古典主義の関係の多様性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

The objective of this research is to re-examine the various problems surrounding historical avant-gardes, “*ritorno al classico* (Return to the Classicism)” and Modernism in the paintings and writings in the Italian Art of the first half of Twentieth Century. The European painters who experienced the era of avant-gardes painting, entered the “*ritorno al classico*” era from mid-1910s. The present research has analyzed mainly the iconography, the style and the techniques, focusing on the memory of classical antiquity, art of the past and mythological themes in the individual works, through a survey of paintings and intensive reading of writings by painters themselves, and has demonstrated the diverse aspects of the relation between avant-gardes and classicism.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	800,000	240,000	1040,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2100,000	630,000	2,730,000

研究分野：近現代美術史

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：イタリア美術、前衛、古典主義、モダニズム、未来派、形而上絵画、シュルレアリスム

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

(1)

20 世紀の絵画における古典の参照やそれに基づいた具象表現は、しばしば退行的な現象として捉えられてきた。本研究では、近年の先行研究を踏まえて、20 世紀初頭のイタリアの画家たちの制作活動および著述を、古典古代や過去の美術作品を探究することを通して、ほかなる「現代性」をめざした創造的な動きとしても捉え、「前衛的な古典主義」（村田宏）の諸相を再検証する。

申請者は、未来派の造形美術と形而上絵画をめぐるこれまでの調査研究において、なぜ、ほかでもない前衛を先導した画家たちが、「過去の美術」へと一斉に向かったのかを問う必要を認識した。カルロ・カルラ、ジーノ・セヴェリーニ、ジョルジョ・デ・キリコらは、絵画制作における古典主義的傾向にとどまらず、「過去の美術」を理論的探究や言説の対象として、自ら「美術史的記述」を紡ぐという営みを積極的に行った。その芸術的・歴史的背景を、イタリアを中心としてヨーロッパの画家たちの個別の作品調査および画家たちによる著述の文献資料収集と精読を通して再検証する。

(2)

20 世紀の具象絵画における神話主題に関する研究は、シュルレアリスム研究を中心に行われており、古典回帰期の造形美術および 20 世紀美術における「古代神話の役割の体系化」（E.ルヴァイエン）への関心は高まりつつある。申請者は、先行研究ならびに、これまでの調査研究から発して、特に職務において行う展覧会事業（2011 年 2 月開幕）の調査研究において、このテーマについて考察する。フランス国立近代美術館（パリ、ポンピドゥセンター）所蔵のシュルレアリスムおよび抽象表現主義の絵画作品、写真作品、彫刻作品、オブジェについて、コレクションの調査および個別の作品調査を行い、その研究成果は、展覧会の企画構成、展覧会カタログの作品解説、エッセイ、教育普及活動などを通じて広く発信する。

2. 研究の目的

20 世紀初頭に前衛絵画の時代を経験した欧州の画家たちの多くは、1910 年代半ばより、「古典回帰」「秩序の喚起」の時代を迎える。画家たちは、彼らにとってまだ近い「過去」における芸術的冒険や革新的な手法と時代精神を回顧しはじめる。と同時に、古代から近代にいたる「過去の美術」に創造の源泉をそろって求めるようになる。だが、カラー

ジュの技法やレディ・メイド、さらには写真技術・複製技術の広範な普及によって、芸術における「独創性」や「表現」という範疇は根底から揺るがされてしまった。その後では、制作における模倣や参照といった意味も、芸術作品の受容や視覚の条件のラディカルな変容の影響を免れえない。

本研究の目的は、前衛を先導した画家たちが、主に 1910-20 年代の古典回帰期において、絵画作品の制作においてのみならず、しばしば古典古代と過去の美術を理論的探究や言説の対象とし、自ら美術史的な記述を行った点に注目し、前衛という近い過去の「記憶」と、古典古代という文明の集団的「記憶」が、どのように矛盾し、融合されているかを、作品調査と文献資料の精読を通して検証することにより、前衛と古典回帰とモダニズムの歴史的関係とその創造の場における葛藤の諸相を明らかにすることにある。

3. 研究の方法

本研究は、研究対象に関して、次の 3 つの調査研究を軸として、作品調査および文献資料収集、その比較・考察・分析を行う。

(1) 画家による「美術史的記述」に関する調査研究

(2) 作品調査および展覧会調査

(3) 受容と批評に関する調査研究

4. 研究成果

(1) 年次計画において進行した、研究途上での成果は、毎年、研究論文、展覧会カタログの作品解説・用語解説として、執筆刊行した（主要な論文等は以下、5. を参照）。

(2) 画家による「美術史的記述」に関する調査研究の主な成果として、カルロ・カルラ、ジーノ・セヴェリーニ、ジョルジョ・デ・キリコ、アンドレ・ドラク、ロジェ・ビシエールらの「過去の美術」をめぐる言説について、フランス・ポンピドゥセンター・カンディンスキー図書館アーカイブほかで、一次資料の閲覧・収集、および著述の精読を進め、画家たちが第一次大戦前後に内的な芸術史の再構築ともいえる試みを続けたこと、また古典回帰期の作品の図像的特徴と言説の諸特性について、両者の照応性において考察した。

(3) 作品調査および展覧会調査の主な研究成果として、図像の分析や技法の比較検討を進めたほか、国内外における関連作品の所蔵状況、現在の研究動向ならびに 2009-2012 年における展覧会企画の国際的な傾向を把

握した。その内容の一部は発表したとともに、次の研究課題において継続して行い、最終的にデータ化する計画である。

(4) 職務における展覧会事業に関連した調査研究の研究成果

① 1910年に生まれた「ポスト印象派(英:Post-Impressionism)」の語に関して、英国テート・アーカイブ所蔵の、ロジャー・フライによるポスト印象派展の展覧会カタログ(1910年、1912年)を閲覧・複写し、企画趣旨および出品作品・展覧会の組織内容などを調査した上で、日本におけるポスト印象派の受容、語の紹介と訳語の変遷に関する調査研究と併せて、『オルセー美術館展 2010「ポスト印象派」』(展覧会カタログ)に用語解説として発表した。

②「シュルレアリスム展——パリ、ポンピドゥセンター所蔵作品による」の展覧会事業と関連した研究成果として、作品調査および同時代の造形・文学作品の比較分析等を通して、シュルレアリスムの造形美術と形而上絵画との影響関係などを再検証した。イタリアにおいて2010年7月に行った、同展の展示候補作品(油彩1点)の真贋調査により、当該作品の制作者・制作背景が判明し、国立新美術館の展覧会事業における贋作作品の展示を未然に防ぐことができた。

(5) シュルレアリスムの造形美術の調査研究(前項目(4)②参照)を継続して行うなかで、1920-30年代の芸術雑誌におけるオブジェの表象と絵画作品の複製図版の関係について、新たな分析の視点をみいだした。それに基づいた論考は、国際美術史学会ニュルンベルク大会(2012年7月)の「第11セッション: The Artefact and its Representations」において口頭発表を行い、その機会には国際的な研究者交流を通して、貴重な示唆を得ることができた。同論文においては、20世紀初頭の前衛絵画、透視図法、オブジェの関係をめぐる諸問題について、複製媒体におけるオブジェの写真図版としての「展示」と絵画作品の複製図版との視覚的効果ほかの影響関係に関する仮説の提示とともに分析し、20世紀の西洋と日本の美術と建築における「オブジェクト」から「反オブジェクト」(隈研吾)的傾向までの、より広い歴史的射程とコンテクストにおいて考察することを試みた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

Mayumi Abe, "The Multiplicity of Artistic Migration in the Representation of the Return: Odyssey, Hebdomeros and the Postmodernity in the art of Giorgio de Chirico", *Crossing Cultures: Conflict, Migration and Convergence*, The Proceedings of the 32nd Congress of the International Committee of the History of Art, Edited by Jaynie Anderson, Melbourne University Press, 2009, pp.635-640. [査読有]

阿部真弓「ジョルジョ・デ・キリコとシュルレアリスム: 内的世界の透視図法」『シュルレアリスム展: パリ、ポンピドゥセンター所蔵作品による』(展覧会カタログ)、国立新美術館・読売新聞社、2011年2月、pp.222-227。[査読無]

Mayumi Abe, "Giorgio de Chirico et le surréalisme: la perspective du monde intérieur", *Le Surréalisme: Exposition organisée par le Centre Pompidou à partir de sa collection*, ex.cat., The National Art Center, Yomiuri Shinbun, Tokyo, 2011, pp.278-281. (前掲論文フランス語訳) [査読無]

Mayumi Abe, "Where The Object Finds its Place?: From its Birth to The "Paginal Exhibition" of Objets Surréalistes", *The Challenge of the Object*, The Proceedings of the 33rd Congress of the International Committee of the History of Art, Germanisches National Museum, Nürnberg, 2013. [査読有、掲載決定済]

[学会発表](計2件)

阿部真弓「前衛と古典主義: 1910-20年代のフランスとイタリアにおける画家たちの作品と著述」日仏美術学会、日仏会館、2012年2月18日。

Mayumi Abe, "Where the Object Finds Its Place?: From Its Birth To The Paginal Exhibition of "Objets Surréalistes""", the 33rd Congress of the International

Committee of the History of Art,
Germanisches National Museum,
Nürnberg(Nürnberg Messe), Germany, 19th
July, 2013.

〔図書〕(計2件)

磯崎新・神保淳乃・阿部真弓(共著)『磯崎新の建築・美術をめぐる10の事件簿』TOTO出版、2010年。

Didier Ottinger、南雄介、阿部真弓、米田尚輝『シュルレアリスム展——パリ、ポンピドゥセンター所蔵作品による』(展覧会カタログ)国立新美術館・読売新聞社、2011年。

〔その他〕

阿部真弓「ポスト印象派の用語について」『オルセー美術館展 2010 ポスト印象派』(展覧会カタログ)、国立新美術館・日本経済新聞社、2010年5月、pp.223-225。

阿部真弓、フランス・オルセー美術館所蔵のアンリ・ルソー、モーリス・ドニ、エドゥアール・ヴューヤールの絵画作品の作品解説、『オルセー美術館展 2010「ポスト印象派」』(展覧会カタログ)、国立新美術館・日本経済新聞社、2010年5月。

阿部真弓、フランス・ポンピドゥセンター所蔵のジョルジョ・デ・キリコ、アンドレ・マッソン、ルネ・クレール、マン・レイ、イヴ・タンギー、ジャン・アルプ、サルバドール・ダリ、ルイス・ブニエール、ジョゼフ・コーネルほかの絵画、素描、写真、映画作品の作品解説、『シュルレアリスム展：パリ、ポンピドゥセンター所蔵作品による』(展覧会カタログ、前掲書)。

阿部真弓「前衛と古典：20世紀イタリア芸術における「過去の美術」と画家による美術史的記述に関する研究」(財団法人鹿島美術財

団「美術に関する調査研究の助成」2009年度助成研究報告)、『鹿島美術研究』年報第28号別冊、2011年11月、pp.556-566。

阿部真弓「様式と自由：アンドレ・ドランの《木立》」『国立新美術館ニュース』No.22、国立新美術館、2012年5月、n.p.。

阿部真弓「イタリア絵画のあしおと」(1)～(5)、『春秋』、春秋社、2010-2011年。
「(1)100年後の未来派」『春秋』2010年2・3月号、pp.1-5；「(2)ジョルジョ・デ・キリコの永遠回帰」『春秋』2010年7月号、pp.28-31；「(3)ジョルジョ・モランディ：日々の謎」『春秋』2010年11月号、pp.23-26；「(4)旅する芸術作品の時代」『春秋』2011年5月号、pp.9-12；「(5)無時間的な方向へと」『春秋』2011年12月号、pp.15-18。

阿部真弓「前衛と古典主義：1910-20年代のフランスとイタリアにおける画家たちの作品と著述」(発表要旨)『日仏美術学会会報』第31号、2012年6月、p.113。

阿部真弓「魂の描線——世紀末芸術と未来派」『ユリイカ』2013年3月号、青土社、pp.118-125。〔査読無〕

6. 研究組織

(1)研究代表者 阿部 真弓 (Abe, Mayumi)
独立行政法人国立美術館・東京国立近代美術館・企画課・研究員
研究者番号：60537330

(2)研究分担者
()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：